

「人里離れたところで神に出会う」 マルコによる福音書 6:30-44

6章の前半では、イエス様は弟子たちを2人1組として各地へ遣わされました。彼らは出かけて行って、病人を癒し悪霊を追い出したと記されています。(7-13節)

イエス様のもとに報告に帰ってきた弟子たちに、「さあ、あなたがただけで人里離れた所へ行って、しばらく休むがよい」(31節)とイエス様はおっしゃいました。

「人里離れた所」という言葉は、イエス様ご自身がそういう場所で、毎日父なる神との交わりを持っておられた姿を思い起こさせます。

私たちにとっても、静かに主と交わる時を持つことは大切なことです。1日が始まってしまえば、忙しさに追われてしまうからです。

私たちが日々主と交わるなら、イエス様に似た者とされるという希望が与えられています。イエス様に似るとは、完璧な人になるということではありません。

イエス様は、神であられるのに、私たちと同じ人となってこの地に来てくださいました。ですから、イエス様は「子は、父のなさることを見なければ、自分からは何事もできない。」(ヨハネ 5:19)とおっしゃいました。「父に聞かなければ何もできない」というイエス様の姿こそ、私たちがキリストに似る目標ではないでしょうか。どんな時にも父なる神のみこころを聞き、それに従うという姿勢です。

人里離れた所に行くために舟に乗り込んだイエス様と弟子たちを見つけた人々は、先回りして彼らを待ち構えました。人里離れた静かなところのはずが、群衆で埋め尽くされた賑やかな場所となったのです。男だけで五千人と、聖書には記されています。

ここで、この後に続く五つのパンと2匹の魚の奇跡が起こるのです。

日も傾き、人々は空腹でした。弟子たちはイエス様に、「人々を解散させてください。そうすれば、自分で周りの里や村へ、何か食べる物を買って行くでしょう。」と進言します。

確かに人は大勢いましたが、人家も店も近くにはありません。事実全くの人里離れた所です。



ところがイエス様は「あなたがたが彼らに食べ物を与えなさい」とお答えになるのです。常識では無理なことです。私は、イエス様が弟子たちを人里離れたところに行かせたのは、このためではなかったかと思うのです。最初に申しましたように、私たちは忙しさの中に身を置いて、自分の計画や都合を優先させてしまいがちです。しかし、人里離れた所とは、それら全てから解放されて、神様が働かれる場所へと出るように導いてくださるということなのです。

私たちの力ではなく、神の力を体験させたいと神様は願っておられるのです。弟子たちはイエス様に、こんな大勢の人にパンを与えるのは無理だと言います。するとイエス様は、弟子たちに「パンは幾つあるのか。見て来なさい。」とおっしゃり、弟子たちはパン5つと魚2匹を、イエス様のもとに持ってきます。イエス様は、群衆を組に分けて座らせるように弟子たちに言い、パンと魚を手に取り、天を仰いで父なる神に賛美の祈りを捧げられるのです。

私たちも、さまざまな状況の中で、まずすべきことは祈りです。自分の考えで事の成り行きを決めるのではなく、天のお父さんに明け渡して祈り求めるのです。神様はどんなことでもおできになるお方なのでありますから。

五つのパンと2匹の魚は、なんと全ての人に行き渡ったのです。人々は食べて満腹したとあります。さらに、パンの残りが12のカゴいっぱいになりました。弟子たちはここで神の力を体験しました。

イエス様は私たちのことも、人里離れた所に招いておられます。自分ではどうすることもできない罪を、イエス様が十字架に負ってくださり、赦してくださいました。

「疲れた者、重荷を負う者は、だれでもわたしのもとに来なさい。休ませてあげよう。わたしは柔和で謙遜な者だから、わたしの軛を負い、わたしに学びなさい。そうすれば、あなたがたは安らぎを得られる。わたしの軛は負いやすく、わたしの荷は軽いからである。」(マタイ 11:28-30)

私たちはイエス様のところに重荷を下ろすことができます。しかしそれで終わりではないのです。イエス様のくびきを負って、イエス様に従いなさいとおっしゃるのです。イエス様の与えてくださる荷は追いやさく軽いのです。そこには喜びがあります。神様が招いておられる道を歩むなら、また、神様が立たせてくださる場所に立つなら、私たちはそこで神様の栄光を拝し、神様の恵みに預かるのです。